慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	De Profundis再考 : 深淵におけるWildeの思想
Sub Title	On De Profundis : The thoughts of Oscar Wilde in the "Depth"
Author	中村, 恵子(Nakamura, Keiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1980
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.39, (1980. 2) ,p.252(35)- 271(16)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00390001-0271

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

De Profundis 再考—深淵における Wilde の思想

中　村　恵　子

Oscar Wilde (オスカー・ワイルド) が獄中において Alfred Douglas (アルフレッド・ダグラス)宛ての長文の手紙を書いたのは出獄を目前に控えた1897年1月から3月にかけてのことであったが，この手紙が Robert Ross (ロバート・ロス) によって *De Profundis*『深淵より』と題され出版されたのは Wilde の死後5年を経た1905年のことであった。George Bernard Shaw (ジョージ・バーナード・ショウ) はこの手紙を「喜劇」と称し「*De Profundis* ほど巧妙な喜劇を書いたアイルランド人はいない」[(1)]と語った。Edward Verrall Lucas (エドワード・ヴェラル・ルーカス) は *De Profundis* の技巧性に，Max Beerbohm (マックス・ビアボム) はその美しい文体とリズムとに注目した[(2)]。Donald Ericksen (ドナルド・エリックセン)[(3)] や Rodney Shewan (ロドニー・シューウァン)[(4)] といった現代における代表的な Wilde 研究家達は *De Profundis* において展開される Wilde 独自の思想を簡単に説明しているに過ぎず，Wilde という一作家の文学活動におけるこの手紙の重要性には触れてはいない。あらゆる文学ジャンルにその才能を発揮した Wilde が残した数多くの作品を数多くの批評家達が論じてきたが，*De Profundis* は未だに正当な評価を受けてはいないのではないだろうか。私は，手紙という形式で書かれたこの散文作品において展開されている Wilde の思想を研究することによって彼がその人生の最後の数年間において，一文学者として何を語ろうとしていたのかということについて考察してみたい。*De Profundis* は Wilde が我々に残した最も美しく且つ最も難解な作品の一つであるが，この文学作品を理解することなしに，文学者 Oscar Wilde を語ることは不可能であろう。

詳細に読み進めてゆくと，*De Profundis* が単なる私的な手紙の域を脱

しており，Wilde 自身の告白録，自伝，批評としての要素を内包しているという事実が容易に理解されうる。最初の動機が如何なるものであったにせよ，書き続けてゆくうちに Wilde 自身，この手紙を自らの思想表明の手段としようという意図を抱くに到ったことも事実である。

> I told you I was going to write to Alfred Douglas. I am still at work at the letter. It is the most important letter of my life, as it will deal ultimately with my future mental attitude towards life, with the way in which I desire to meet the world again, with the development of character : with what I have lost, what I have learned, and what I hope to arrive at. At last I see a real goal towards which my soul can go simply, naturally, and rightly.... my whole life depends on it.[(5)]

親しい友人への上述の手紙において Wilde は「今，私は人生において最も重要な手紙を書いているところだ」と伝えている。自らの過去，現在，未来，そして，自己の人格の成長の軌跡を示す手紙を書いているところだと。"My whole life depends on it." 「私の全生涯はこの手紙にかかっている」という言葉は Wilde が如何にこの手紙に自らの文学者としての生命を，更には，一個の人間としての存在を賭けていたかを如実に語っている。

> Also there are in the letter certain passages which deal with my mental development in prison, and the inevitable evolution of character and intellectual attitude towards life that has taken place .... As regards the mode of copying: .... I think that the only thing to do is to be thoroughly modern, and to have it typewritten .... I wish the copy to be done not on tissue paper but on good paper such as is used for

plays, and a wide margin should be left for corrections.[6]

この Robert Ross への手紙においても Wilde は同様の主旨を述べ更には Douglas 宛ての手紙の取り扱い方法について詳細な指示を与えている。友人に書き送ったこれら二通の手紙から，彼が如何にこの Epistola: In Carcere et Vinculis[7]（書簡：獄につながれて）を重要な作品と見なしていたかを推測するのは困難なことではない。この Epistola: In Carcere et Vinculis を Wilde の最後の散文作品として扱い，そこに展開される著者の思想を考察してゆきたい。

"Dear Bosie"「親愛なるボジーへ」(因に Bosie とは Alfred Douglas の愛称である）と書き出される *De Profundis* の前半の部分において Wilde は Douglas との関係を中心に自らの過去を振り返っている。「本当に愚かな人間とは自分自身を知らない人間であり，長い間，私もそして君もそんな人間だった[8]」と Wilde は語り Douglas との反知性的，反芸術的関係を後悔している。Wilde の芸術家としての活動を促進することができずむしろそれを阻んだ Douglas の数々の行為を想起しながら，著者は Douglas の性質における決定的な欠陥を指摘している。

> In you Hate was always stronger than Love....Love is fed by the imagination, by which we become wiser than we know, better than we feel, nobler than we are: by which we can see Life as a whole: by which, and by which alone, we can understand others in their real as in their ideal relations....Hate blinds people.... Love can read the writing on the remotest star, but Hate so blinded you that you could see no further than the narrow, walled-in, and already lust-withered garden of your common ideas.[9]

人を盲目にする Hate（憎悪）が Douglas を支配し，愛の欠如が彼の imagination（想像力）の成長を阻止していた。己れの imagination を守

る為に，魂が朽ち果てるのを防ぐ為に，更には常に目を開いて物事の真実を見極める為に，Wilde は，“At all my costs I must keep Love in my heart”[10]「是が非でも，愛を心に持ち続けねばならない」と自分自身に幾度となく言い聞かせるのである。Douglas によって象徴される憎悪の世界[11]からの脱却は芸術家 Wilde にとって非常に重要な意味を持っていたと思われる。

「現代の芸術と文化に対して象徴的な関係にある人間であった[12]」と自らを語りながら，Wilde は一芸術家としての過去の業績を詳しく書き留めてゆく。「芸術をひとつの哲学とし哲学をひとつの芸術たらしめた」「戯曲，小説，散文詩，押韻詩，巧緻なもしくは幻想的な対話。およそ私の触れるものは，すべてこれを新しい美の様式につくりあげた」「私はあらゆる体系を一句のうちに，すべての存在をひとことのエピグラムに要約した[13]」Wilde は自己の業績をこのように自信に満ちて語った後，“Tired of being on the heights I deliberately went to the depths in search for new sensations.”[14]「高みにいることに飽きて，私は新しい感動（興奮）を求めてわざと深淵にまで降りていった」と告白している。名声と栄誉との絶頂にあった彼があらゆる快楽を求め続けていたのは事実である。Douglas とのただれた関係もその一つであった。しかし，その結末として，彼は，財産も，家族も，社会的地位も失い牢獄という現実の深淵に自分自身が突き落とされるとは想像していなかったはずである。過去から現在へとその視点を移してゆきながら，Wilde は自らが置かれている牢獄という現実の中で何を発見したかを，何が己れを救ってくれるのかを語り始める。

Morality does not help me. I am a born antinomian. I am one of those who are made for exceptions, not for laws .... Religion does not help me. The faith that others give to what is unseen, I give to what one can touch, ane look at .... Reason does not help me. It tells me that the laws under which I am convicted are wrong and unjust laws, and the systen under which I have suffered a

wrong and unjust system.[15]

Morality（道徳）にも，Religion（宗教）にも，Reason（理性）にも救いを見い出すことはできない。深淵においての再生の基盤となりうる救いは，唯一，自己の置かれている現実を直視し，その現実を受け入れることだと Wilde は悟る。「自らの体験を拒絶することは自らの発展を阻むことになるだろう」，それゆえに，「牢獄に囚われている囚人としての自らの現実を認めよう[16]」と彼は決意する。現実を直視することによって Wildeは自らの芸術と人生との内に新しい発展を見る。この新しい発展こそが Sorrow（悲哀）と Suffering（苦悩）との新しい世界の発見であった。Wilde がその人生において初めて体験する新世界であった。"Suffering is really a revelation."「苦悩は確かに啓示である」「苦悩によって人はこれまで気づかなかったものに気づくようになる。苦悩を知ることによって芸術について本能的にぼんやりと感じていたことが，このうえもなく明確な洞察力と深い理解力とをもって，知的にも感情的にも自覚される[17]」Wilde は繰り返し自らが発見した新世界について語っている。

> I now see thot sorrow, being the supreme emotion of which man is capable, is at once the type and test of all great Art .... More than this, there is about Sorrow an intese, an extraordinary reality.... For the secret of life is suffering. It is hidden behind everything.[18]

「悲哀は人間の懐きうる最高の感情であるがゆえに，あらゆる偉大な芸術の典型であり，同時に試金石でもある....苦悩こそあらゆるものの背後にかくされている[19]」Sorrow と Suffering とについてのこれらの言葉は Wilde の新世界の発見を単に語るだけではなく，彼のそれ以前の思想を修正するという役割をも担っている。

Pain is not the ultimate mode of perfection. It is merely

provisional and a protest. It has reference to wrong, unhealthy, unjust surrounding. When the wrong, and the disease, and the injustice are removed, it will have no further place.[20]

1890年に出版された *The Soul of Man under Socialism*『社会主義下の人間の魂』において Wilde は Pain（苦悩）の重要性，あるいはその必要性をこのように否定していた。

Truth in Art is the unity of a thing with itself: the outward rendered expressive of the inward: the soul made incarnate: the body instinct with spirit. For this reason there is no truth comparable to Sorrow. There are times when sorrow seems to me to be the only truth.[21]

また，*De Profundis* において，「芸術における真理とは事物がそれ自体と一致すること，外面が内面の表現たること」それゆえに「悲哀こそ唯一の真理である」[22]と表明されている Wilde の思想は，1885年に出版された *The Truth of Masks*『仮面の真理』において彼が述べた "In art there is no such thing as a universal truth"[23]「芸術においては普遍的な真理などありはしない」という説を修正する結果になっている。確かに，この Sorrow と Suffering との発見は一人の人間としての Wilde の精神の領域の広がりを，更には彼の思想の深遠化を助けている。しかし，芸術家としての Wilde は現実に悲哀や苦悩を体験する以前に，その作品のいくつかにおいて，悲哀や苦悩を主題として扱っていた。*The Happy Prince*[24]『幸福の王子』や *The Young King*[25]『若い王様』はその代表作と言えるであろう。Wilde 自身，この事実に触れ次のように語っている。「人生のあらゆる瞬間において，人は己れの過去の姿を保つと同時に，未来の姿をも蔵しているものだ。Art is a symbol, because a man is a symbol（芸術は一つの象徴だ。人間が一つの象徴であるから）」[26] と。快楽を追い求め続けながらも，その快楽の反対側にあるものの存在を Wilde は熟知していたはず

である。imagination を駆使して悲哀と苦悩との世界を美しく創り上げていたWildeは，その悲哀と苦悩という芸術上の一つの象徴が自らの人生の象徴でもあったということを深淵において経験的に知り得たのであった。

De Profundis において著者が次に展開するのは独自のキリスト論である。キリストを一人の人間として把握することは19世紀後半においては決して新しい考え方ではなかった。キリスト論における Wilde の独創性はキリストを個人主義者，そしてまた，ロマン主義者として捉えるところにある。「私はキリストの真の生活と芸術家の真の生活との間に非常に緊密且つ直接的なつながりを見る」[27]と語り始めると共に，Wildeは過去においてもキリストについて同様な見解を述べたことを想起する。

> I had written in *The Soul of Man* that he who would lead a Christlike life must be entirely and absolutely himself, and had taken as my types not merely the shepherd on the hillside and the prisoner in his cell but also the painter to whom the world is a pageant and the poet for whom the world is a song. I remember saying once to Ander Gide.... that there was nothing that either Plato or Christ had said that could not be transferred immediately into the sphere of Art, and there find its complete fulfilment.[28]

> And so he who would lead a Christliks is he who is perfectly and absolutely himself. He may be a great poet, or a great man of science.... or a maker of dramas, like Shakespeare....[29]

Andre Gide（アンドレ・ジィド）との会話においても *The Soul of Man under Socialism* においてもキリスト教的生活を過ごそうとする者は完全に且つ絶対に自己に即して生きるべきだと，すなわち，真の個人主義者でなければならぬと，Wildeは主張し，その理想的典型を，画家や詩人とい

った芸術家にも求めていたのだった。従って *De Profundis* において展開されるキリスト論は Wilde が過去において表明したキリスト論を押し進めたものであったと言えよう。

悲哀と苦悩という新しい世界を経験的に知り得た一芸術家 Wilde は，以前よりも強く芸術家としてのキリストの側面に執着する。「キリストの資質の根底そのものは芸術家の資質の根底と同じものであった。つまり，強力な炎のような imagination だったのだ。キリストは芸術の領域において，創作の唯一の秘密である，かの imaginative sympathy（想像力による共感）を，様々な人間関係のあらゆる領域にわたって体現したのだ。癩病人の癩を，盲人の闇を，快楽のために生きる者の恐ろしい惨めさを，富める者の異様な貧しさを理解したのだ」[30]。自らに誠実に生きる個人主義者であると共に imaginative sympathy によって他者の悲哀と苦悩とを理解しえたキリストの内に著者は真の芸術家の，真のロマン主義者の真髄を見い出している。換言すれば，Wilde はキリストを自らの人生及び芸術における理想的人間として把握しているのである。ここでロマン主義者としてのキリストについて，更には Wilde 自身のロマン主義理論について考察してみたい。彼はキリスト自身の renaissance（再生）がシャルトルの大寺院，一連のアーサー王伝説，アッシシの聖フランチェスコの生涯，ジョットーの芸術，ダンテの『神曲』といったような内から霊によって湧き出るものによって，すなわち imagination によって創造されたものをもたらしたと主張する。しかし，このキリストの renaissance は classical Renaissance（古典的文芸復興）によって遮られ損われてしまい，ペトラルカ，ラファエロの壁画，パラディオふうの建築，形式的なフランス悲劇，聖ポール寺院，ポープの詩といったような外から生命の欠如した法則によって創造されたものが芸術の領域を支配するようになったと，Wilde は断定的に述べている[31]。内面から生ずる imagination によって創造されるものが，すなわち，外面の形式に支配される古典主義芸術に反するロマン主義芸術こそが，一芸術家キリストの renaissance にふさわしいものなのである。Wilde はこの内的 imagination＝imaginative sympathy こそが，キリ

ストを真の先駆的ロマン主義者たらしめているのだとその論を導いてゆく。

> ....wherever there is a romantic movement in Art, there somehow, and under some form, is Christ, or the soul of Christ. He is in *Romeo and Juliet*, in *The Winter's Tale*, in Provençal poetry, in *The Ancient Mariner*, In *La Belle Dame sans Merci*, and in Chatterton's *Ballad of Charity*. We owe to him the most diverse things and people. Hugo's *Les Misérables*, Baudelire's *Fleurs du Mal*....[32]

Shakespeare (シェイクスピア), Coleridge (コールリッジ), Chatterton (チァタァトン), Hugo (ユーゴー), そして, Baudelaire (ボードレール) の作品を好例として挙げながら「ロマン派の動きがあるところには必ず何かしら, 何らかの形でキリストが, あるいはキリストの魂が存在する」と著者は述べている。そして, このロマン主義者キリストの根底に存在する imagination こそ愛の一形態であったと Wilde は結論付けるのである。"imagination was simply a form of Love."[33]「想像力とは愛の一形態に過ぎなかった」。この言葉は Wilde が Alfred Douglas の性格の決定的欠陥について指摘した, "In you Hate was always stronger than Love .... Love is fed by the imagination.... your lack of imagination was the one really fatal defect of your character."「君の内においては, 憎悪が常に愛よりも強かった....愛は想像力によって育まれる....君に想像力が欠けていたというのは君の性格の致命的欠陥だった」という言葉の対極をなすものであるということはもはや明白である。Douglas によって象徴される imagination の欠如した憎悪の世界からキリストによって象徴される imagination と愛との世界への, 更には, ロマン主義の世界への脱却こそが Wilde が切に望んだことであり, これこそが *De Profundis* の一つの大きな主題と言えよう。

キリストを論じることによって, Wilde は自らの芸術家としての再生の道を見い出したのである。「かりに私が, 芸術的作品を創り出すという意

味で，再びものを書くとすれば，それを通じて己れを表現したいと思う二つの主題がある。その一つは，“Christ, as the precursor of the Romantic movement in life”『人生におけるロマン主義運動の先駆者としてのキリスト』であり，他の一つは“the Artistic life considered in its relation to Conduct”『行為との関わりにおいて考えられた芸術的生活』である」[34]。このように語りながら，Wilde は現在から未来へと，己れが生きうる未来へと，その視点を移してゆくのである。牢獄という現実の深淵の中で発見した悲哀と苦悩という新しい世界を糧とし，キリストによって象徴される真の芸術家の世界への脱却を決意した著者はより具体的に出獄後の自らの在り方について語り始める。自信に満ちた力強い語調で Wilde は語る。「私は長生きをし，生涯の終わりに“Yes: this is just where the artistic life leads a man.”（「そうだ：これこそまさに芸術的生活によって人が行きつくところだ」）と言えるような性質の作品を作りたい」[35]と。そして，ここで，Wilde は最も完璧な人物，すなわち，深淵における悲哀と苦悩とを知っており，その内にキリストが懐いていた imaginative sympathy を秘めていた人物として Verlaine（ヴェルレーヌ）と Prince Kropotkin（クロポトキン公爵）を挙げている[36]。

彼は新世界を発見し未来への希望を見い出して，“What a beginning! What a wonderful beginning!”[37]「何という始まり！何と素晴らしい始まりなのだろう！」と書き記している。この言葉は牢獄での体験が彼にとっては芸術家としての再生への“initiation”そのものであったことを示していると思われる。Pleasure（快楽）の世界から Sorrow（悲哀）の世界を経て新たなる imaginative sympathy の世界へ飛躍しようとする，救いを見い出した Wilde の姿がここに見られる。彼が過去において数多くの作品の中で取り扱ってきたあの experience（経験）から higher innocence（より崇高な無垢）へというテーマを Wilde は今や自らの生き方において示しているのであろう。Christopher Nassaar（クリストファー・ナッサー）が指摘しているように，それは，Douglas によって象徴される悪の世界からキリストによって象徴される善の世界への旅立ちであったのかも

しれない。[38]

Wilde は未来にその視点を置きながら Nature（自然）について論じ始める。

> I feel sure that in elemental forces there is purification, and I want to go back to them and live in their presence.... The mystical in Art, the mystical in life, the mystical in Nature——this is what I am looking for.... Society, as we have constituted it, will have no place for me, has none to offer; but Nature, whose sweet rains fall on unjust and just alike, will have clefts in the rocks where I may hide.... she will cleanse me in great waters, and with bitter herbs make me whole.[39]

自らの再生を期して，彼は浄化の力を持つ自然へ戻り，その中で生きようと決意する。芸術における神秘を，人生における神秘を，そして，自然における神秘を探し求めるために。自然もまた自らを守ってくれるであろうと彼は確信するのである。自然へのこの絶対的な信頼は，*The Decay of Lying*『虚偽の衰退』において繰り返し述べられた，芸術を模倣する自然，芸術の単なる材料に過ぎない自然という Wilde の自然を軽視する姿勢を修正するものである。

> All bad art comes from returning to life and Nature, and elevating them into ideals. Life and Nature may sometimes be used as part of Art's rough material, but hefore they are of any real service to Art they must be translated into artistic conventions.... external Nature also imitates Art. This is the secret of Nature's charm, as well as the explanation of Nature's weakness.[40]

自然へと回帰しては立派な芸術作品を創造することはできないと主張した Wilde は，文学，芸術において realism（リアリズム・写実主義）手法を採ることを強く否定した。

> As a method Realism is a complete failure, and the two things that every artist should avoid are modernity of form and modernity of subject matter. To us, who live in the nineteenth century, any century is a suitable subject for art except our own.(41)

自らが生きる時代を realism を手段として描くことを自らに最も強く禁じていた Wilde は，realism に相反するものとして romanticism（ロマン主義）を把握していた。*The Decay of Lying* において Wilde がこのように捉えていた romanticism が，彼が *De Profundis* において主張するところのキリストによって最も顕著に示された，imaginative sympathy に，更には，愛に，その根底を有する romanticism とは位相を別にするものであることはもはや明白である。自然と realism 手法とに反するものとしての romanticism ではなく一人の人間として，一人の芸術家として，真の再生を達成するための手段として imaginative sympathy をその基とする新たなる romanticism を彼は発見したのである。この新たなる romanticism は自然を拒むものではなかった。ましてや，realism と対立するものではなかった。牢獄という現実を直視し，自らが生きねばならないその過酷な現実を具に描写した Wilde は realism をその手法として *De Profundis* を書き上げたのである。*De Profundis* を書くことによって彼は己れの内に romanticism と realism との融合を果たしたのではなかったのであろうか。この点については Wilde の出獄後の作品を検討する必要があるのであるが，その前に *De Profundis* の随所において著者が繰り返し述べている一つの言葉に注目したい。

悲哀と苦悩とについて，キリストについて，もしくは自然について論じている全ての箇所において Wilde は常に，"The supreme vice is sha-

llowness. Whatever realized is right."（「最高の悪徳，それは浅はかということだ。身をもって理解したことだけが真実である」）と語っている。shallowness という悪徳から常に自由でいたいと彼は望んでいたに違いない。深淵の内にて身をもって理解した悲哀と苦悩との世界を，キリストの imaginative sympathy の世界を，偉大なる自然の世界を，更には新たなる romanticism の世界を真実と悟った時，Wilde は，"....to have become a deeper man is the privilege of those who have suffered. And such I think I have become."[42]（「より深い人間になるというのは苦しんだ人間の特権だ。私はそんな一人になったと思う」）と自信に満ちて語るのである。

shallowness から depth（深遠）へという自己の成長を遂げることが Wilde の獄中における真の目的であったのであろう。従って，彼の魂の成長の軌跡とその思想の発展とを記録した *De Profundis* は deeper man（より深遠な人間）になろうとする一人の人間を描く Bildungsroman（形成小説・教養小説）としての要素を内包すると共に，それはまた，一人の芸術家の再生の具体的出発点でもあったのである。Oscar Wilde が自らの再生の究極の目標を真のロマン主義者，キリストに求めていたことは明らかである。過去において imagination と知性とによって悲哀の世界を描いた Wilde は現実に悲哀と苦悩とを経験することにより imaginative sympathy という新しい創作基盤を見い出す。愛をその根底に有する imaginative sympathy こそ Wilde が初めて悟り得た新しい romanticism そのものであったのである。そしてこの imaginative sympathy とは悲哀と苦悩とを，更には真の愛とを知る deep man だけが持ちうるものなのである。彼にとってキリストこそ the deepest man（最も深遠な人間）であった。"He is just like a work of art himself"[43]「彼（＝キリスト）はまるで芸術品のようだ」と語る時，Wilde は自らの生をも，その内的成長によって，芸術品のように完成させたいと願っていたはずである。

Alfred Douglas との関係こそを後悔すれ，Wilde は自らが快楽の世界に生きてきたことを決して悔やんではいない。本当に，すなわち，相対的

に悲哀と苦悩との世界を知るためにも，更には真に deeper man へと成長するためにも，快楽の世界に生きてきた自らの過去を彼はしっかりと見つめ，それを肯定している。牢獄という深淵の内にあって過去を振り返り，現在を見つめ，そして，未来を志向しつつ，芸術品のごとく自己を完成しようとする Wilde は *De Profundis* を書くことによってもうすでに芸術家としての再生を成し遂げていると私には思われる。自分自身を客観的に見つめ，自らが新たに発見した世界を美しい散文に書き上げるということは真の芸術家の仕事に他ならないからである。

出獄後の Wilde の創作活動について述べる前に現実の深淵を経験する以前の彼の芸術家としての，そして一人の人間としての姿に触れておきたい。Oscar Wilde は詩人としてその文学活動を開始したが，彼の才能はあらゆる文学の領域に挑戦した。詩人としての Wilde が残した数多くの作品のほとんどは1870年代から80年代の初期にかけて，すなわち，彼の文学活動の初期に，集中的に書かれた。多くの批評家が指摘しているように，彼の詩のほとんどは Milton（ミルトン），Keats（キーツ），Browning（ブラウニング），Swinburne（スウィンバーン）といったロマン派の巨匠達の作品を模倣したものであるが，*The Sphinx*[44]『スフィンクス』と *The Harlot's House*[45]『娼婦の家』との二編の詩は Wildeの独創性を顕著に示している傑作である。客体を観察する冷厳な眼をもって詩人は明と暗，生と死，更には自らの内に分裂して存在する肉体と精神との乖離を具に描いている。死という宿命を背負った人間の内に暗く流れる様々な想念を彼は的確に描写している。

劇作家としての Wilde は 'comedy of manners'（風俗喜劇）と称される一連の喜劇と *Salomé*[46]『サロメ』によって代表される悲劇とを書いたが，彼がそれらの喜劇，あるいは，悲劇的な史劇において常に表現しようとしたのは経験によってより崇高な無垢を自らの内に体得しようとする人間の美しい姿であった。しかし，無知なる無垢から経験を通して崇高なる無垢へと飛躍する人間の積極的な生き様を，そしてまた死すべき運命から逃れえない人間の悲しみを最も美しく且つ的確に伝えているのは Wilde の才

能が余す所なく発揮されている数々の物語においてであろう。

物語作家としての Oscar Wilde は非現実の世界を美しく描くことによって現実の恐ろしさと悲しさとを伝えることに成功した。しかし *The Picture of Dorian Gray*[47]『ドリアン・グレイの肖像』という唯一の長編小説においてはその試みは必ずしも成功しているとは言えない。彼は自らの知性に依存しすぎたのである。Wilde 独自の芸術論を，人生哲学を，そして崇高なる無垢を求めずして破滅してゆく人間の姿を伝えようとはしているが，長編小説という手段を彼は知性によってのみ得ようとしていたのである。力作ではあるが断片的な作品となってしまった所以である。

The Intentions[48]『意向集』によって代表される評論の分野で Wilde が提唱した芸術論は前述の *The Decay of Lying* において示したように，自然へと回帰することを否定し imagination と知性とを駆使して romanticism を推進させるという意図によって貫かれている。対話体や物語体によって展開される彼の独創的な芸術論は確かに説得力があり常に芸術家であろうとした Wilde の真摯なる情熱を伝えている。

機知に富み，会話の天才であり，寛大であった Oscar Wilde。類いまれなる才能に恵まれ，幸福な家庭を築いていた彼が破滅への道を歩み出したのは *Lady Windermere's Fan*[49]『ウィンダミア卿夫人の扇』に始まる一連の 'comedy of manners' がロンドンで大成功を収めた1892年頃からだったと思われる。その数年前に知り合っていた Alfred Douglas は Wilde の富と名声と社会的地位とを利用しうる限り利用した。ぜいたくを尽くした快楽に溺れてゆく自分自身を Wilde は Douglas と別れることによって救おうとしたが無駄であった。最も悲しむべきことは思考し創作する時間が快楽によって蝕まれていったことであった。Wilde は破滅への道を進んでいった。芸術家としての，更には人間としての Wilde を破滅へと導いたのは同性愛[50]という倒錯した世界でもなければ，Alfred Douglas でもなかった。彼の弱さが原因だったのである。Douglas によって象徴される快楽の世界，憎悪の世界，更には非芸術的世界から脱却できなかった自らの弱さゆえに Wilde は創作という唯一の自己の存在の証（=identity）を失

ってしまったのである。

投獄される以前の Oscar Wilde の業績と自己破滅へと歩んだ彼の姿とを書き記すことが私にはどうしても必要だった。*De Profundis* を書かねばならなかった Wilde の内面を，あるいは，彼に *De Profundis* を書かせた内なる衝動を考察するために。最初に述べたように，Wilde は "My whole life depends on it." と語り *De Profundis* 執筆に自らの文学者としての，更には一人の人間としての生命を賭けていた。彼は書かずにはおれなかったのである。自己の存在証明（=identity）である書くという行為に自らの生命の証を求めずにはいられなかったのである。そして深淵という初めて経験した世界で体得した思想を，以前表明した思想を修正するためにも，未来の創作活動の基盤として具体化するためにも，書いておかなければならなかったのである。更に，Wilde は過去において自らが数々の作品において探究してきた普遍的なテーマ，すなわち，経験を媒体としてより崇高な無垢へと到達する人間の姿を，死という宿命を背負った人間が生きうる生存基盤を，己れを材料として描かねばならなかったのである。Oscar Wilde は *De Profundis* を書くことによって真の芸術家の再生に賭ける比類なき強さを示したのである。その強さとは，自己の存在証明（=identity）を求めてやまない真実なる人間の心の叫びに他ならなかった。

Reading（レディング）監獄から Wilde が自由の身となってフランスへ渡ったのは1897年5月19日のことであった。*De Profundis* において自分自身を表現したいと語っていた二つの主題を作品化することは彼にはできなかった。再びDouglas と出会い，そして，彼と別れた後はパリの安宿に住みつき，友人らから借金しては快楽に身を委ねるというのが Wilde の生活であった。彼があれ程強く望んでいた再生は実生活においては実現されなかった。しかし彼は *The Ballad of Reading Gaol*[(51)]『レディング監獄のうた』を完成させた。C. 3. 3. という囚人番号をペン・ネイムとして書かれたこの作品は現実に起こった殺人事件を題材としており，愛する者を殺害せねばならなかった一人の男の内面の苦しみがその主題となっている。

imaginative sympathy によって死刑囚の悲哀と苦悩とを把握し，その男の悲劇を romanticism と realism の結合という新しい手法で普遍化している Wilde の中に，私は再生後の一芸術家の姿を見い出す。同時代に起こった事件を題材として扱うことも realism という手法をとることも *The Decay of Lying* において彼が強く否定していたことであった。Wilde は新しい世界に挑戦したのであった。と同時に，*The Ballad of Reading Gaol* には，彼が過去において *The Sphinx* や *The Harlot's House* で扱っていた人間の内部の明と暗，生と死，という普遍的テーマが再び取り上げられているのである。芸術家としての Wilde の眼は決してその視点を変えてはいなかった。

また，彼はイギリスの牢獄のシステムの改良を求めて Daily Chronicle (デイリー・クロニクル紙)に二通の手紙を投稿した。*The Case of Warder Martin: Some Cruelties of Prison Life*[53]『マーチン看守事件；獄中の残虐行為』と *Prison Reform*[53]『監獄改革』と題されたこれらの手紙は，現実に牢獄という深淵で苦しみ抜いた者だけが持ちうる説得力に満ちており実際にいくつかの改良を政府に促す結果となった。

そして Sebastian Melmoth (セバスチャン・メルモス) という偽名で Wilde が最後に成し遂げた文学的業績は，フランスの作家 Jule Barbey d'Aurevilly (ジュール・バルベー・ドールヴィリ) の長編小説 *Que Ne Peurt Pas*『決して死なぬもの』を英語に翻訳することであった。病魔に冒されつつパリの安宿で "Pity....is what never dies." (「隣れみこそ決して死なぬもの」) と書き記した Wilde には憎悪も苦悩をも超越する pity の存在を悟り得た，現実の深淵を生き抜き，人間としての深遠さに到達した者の，すなわち，deep man の姿が見られる。

Wilde は預言者でもましてや哲学者でもなかった。彼が提唱した数々の思想は超越されてゆくであろう。しかし彼は最後まで本当の芸術家であった。換言すれば "positive nihilist" (「積極的虚無主義者」) であった。人間の宿命を知り尽くした nihilist であったがその人間の存在基盤を探求し続ける positivism を失うことは決してなかった。Oscar Wilde を普遍的

な文学者としたのは彼の "positive nihilist" としての資質であった。*De Profundis* は Wilde のこの資質を最も明白に伝えている作品だと私には思われる。深淵において再生に執着しながら自らを見つめ続けるというのは，死という宿命に出会うまで積極的に生きようとする "positive nihilist" の姿に他ならないからである。 (1979. 9)

(引用に用いたテキストは J. B. Foreman (ed.): *Complete Works of Oscar Wilde* と Rupert Hart-Davis (ed.): *The Letters of Oscar Wilde* とである。)

注

(1) Beckson, Karl, ed. *Oscar Wilde: The Critical Heritage*, 1970, PP. 243—244

(2) Ibid. PP. 244—251

(3) Ericksen, Donald H. *Oscar Wilde*. 1977

(4) Shewan, Rodney. *Oscar Wilde: Art and Egotism*. 1977

(5) a letter to More Adey: *The Letters of Oscar Wilde*. P. 419

(6) a letter to Robert Ross: Ibid. PP. 512—513

(7) Ibid. P. 513: 友人 Robert Ross への手紙において自らの手紙を Epistola: In Carcere et Vinculis と称してもよいと Wilde は述べている。

(8) *De Profundis*; *The Letters of Oscar Wilde*. P. 425

(9) Ibid. P. 445

(10) Ibid. P. 457

(11) Alfred Douglas は母親に溺愛されて育ったが暴力的な父親である eighth Marquess of Queensberry を憎み続け自らの父親を破滅させることに執念を燃やしていた。Wilde を促して Queensberry と法廷で対決させたのも彼を破滅させんとしたからであった。

(12) *De Profundis; The Letters of Oscar Wilde*. P. 466

(13) Ibid.

(14) Ibid.

(15) Ibid. P. 468

(16) Ibid. P. 469

(17) Ibid. P. 473

(18) Ibid.

(19) Ibid.

(20) *The Soul of Man under Socialism*: *Complete Works of Oscar Wilde*. P. 1103

(21) *De Profundis; The Letters of Oscar Wilde.* P. 473

(22) Ibid.

(23) *The Truth of Masks; Complete Works of Oscar Wilde.* P. 1078

(24) 1888年に出版された。

(25) 1891年に出版された。

(26) *De Profundis; The Letters of Oscar Wilde.* PP. 475—476

(27) Ibid. P. 476

(28) Ibid.

(29) *The Soul of Man under Socialism ; Complete Works of Oscar Wilde.* P. 1087

(30) *De Profundis; The Letters of Oscar Wilde.* P. 471

(31) Ibid. P. 482

(32) Ibid.

(33) Ibid. P. 484

(34) Ibid.

(35) Ibid. P. 488

(36) Ibid.

(37) Ibid.

(38) Nassar, Christopher S. : *Into The Demon Universe; A Literary Exploration of Oscar Wilde.* 1974. PP. 147—164

(39) *De Profundis; The Letters of Oscar Wilde.* PP. 509—510

(40) *The Decay of Lying; Complete Works of Oscar Wilde.* PP. 991—992

(41) Ibid.

(42) *De Profundis; The Letters of Oscar Wilde.* P. 489

(43) Ibid. P. 487

(44) 1894年に出版された。

(45) 1885年に出版された。

(46) 1893年に出版されたがフランス語で書かれていた。英語版は翌年出版された。

(47) 1890年に出版された。

(48) 1891年に出版された。*The Decay of Lying, Pen, Pencil and Poison, The Critic as Artist, The Truth of Masks* が収められている。

(49) 1892年，St. Jame's Theatre で上演され，翌年，11月に出版された。

(50) Wilde は 1886年，Robert Ross と知り合った時から同性愛者となったと思われる。同性愛という世界が彼の芸術及び人生を破滅へと導いたとは考えられない。1880年代中頃から90年代初期にかけての約10年間が芸術家としての Wilde の全盛期であったのであるから。

(51) 1898年に書き上げられ，同年 2 月には出版された。

(52) 1897年5月に Daily Chronicle 紙上にて出版された。
(53) 1898年3月に Daily Chronicle 紙上にて出版された。